

# 唯物史観の上部構造

— エンゲルス三書簡の回顧 —

井 藤 半 彌

## 1. エンゲルスの三書簡

唯物史観（史的唯物論）が経済を中心として人間の歴史社会の解釈をするものであることは、いまさら説明するまでもないことである。マルクス主義を基調し、これに立脚する学者の現実社会の分析において、経済の側面に重点がおかれているのは当然のことである。ところが、唯物史観に立脚する現実問題の研究——例えば日本の政治、法律、宗教、文芸等に関する歴史的、現実的研究——と題するものをみると、すべての現象、出来事を経済関係のみによって、解釈しようとするものも多いのである。われわれ非マルクス主義の立場のものからみると、経済以外の要因が、しばしば、不当に軽視、ときには無視されていることがある。一々具体的に名をあげて指摘することは、さしひかえる。しかし、試みに、その専門とする分野において、この傾向の研究、教科書と称せられているものを繙いてみよ。人間社会のあらゆる具体事実が、みな経済的事実のみによって規制されているかの如く取扱われている例を多く見出すであろう。

これは、はたしてマルクス主義に忠実な研究態度といえるのであろうか。結論をいえば、マルクス、エンゲルスは、このような偏頗な経済過重論には、むしろ反対の立場をとり、この種のゆき過ぎを、つよく、いましめているのである。エンゲルスは1890年に、ブロッホ宛の手紙のなかで、つぎのように述べている。

「往々にして経済的な面に、そのうけるべき以上の重点が後進者たちによ

って、おかれていることについては、マルクスも私も一部分は自ら責任を負わねばならない。……主要命題を覚えこむや否や、そして、それも正しくなされなれているとは限らないのに、新たな理論を完全に理解したと信じ、即座にこれを駆使しうると信ずるということは、遺憾ながら、あまりにも、しばしばあることである。そして、このような非難を私は近頃の『マルクス主義者』の少なからざる人々に加えざるを得ない。また驚嘆に値する馬鹿馬鹿しいことが、事実、行なわれているのである」(後に掲げる『マルクス・エンゲルス書簡選集』独文 504 頁, 邦訳 247—248 頁)。

この稿の主たる目的とするところは、唯物史観そのものを全体にわたって解説したり、また批判したりしようとするものではない。一部のマルクス主義者の間の経済過重論が、必ずしもマルクス、エンゲルスの教義に忠実なものでないということ、いわゆる上部構造が、歴史社会の発展に、ある限定された範囲内であるとはいえず、とにかく社会変化の要因となる場合があることを、19世紀末にエンゲルスが書いた三つの手紙によって説明しようとするのである。この三つの手紙は、私的・非公開文書ではなく、いまでは学界の共有財産であり、自明のこととなっているものであるが、最近の学界、ことにマルクス主義が経済学界の一中心勢力となっているわが国では、どうかと思われる労作が多く、この手紙の論旨をいま一度よく反省することが斯学発展のために急務であると信ずるからである。

エンゲルスの三つの手紙というのは、つぎのものである。いずれも、みなロンドンで書かれている。

- (1) 1890年9月11日附のヨゼフ・ブロッホ (J. Bloch) 宛の手紙。
- (2) 同年10月27日附のコンラード・シュミット (C. Schmidt) 宛の手紙。
- (3) 1894年1月25日附のハインツ・スタルケンブルグ (H. Starckenburg) 宛の手紙。

原文は K. Marx / F. Engels, *Ausgewählte Briefe*, besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Stalin-Institut beim ZK der SED, Berlin 1953. 及び英訳

K. Marx and F. Engels, Selected Correspondence 1846—1895, trans. by Dora Torr, London, 1934. に、収録されている。向坂逸郎・岡崎次郎編訳『唯物史観』(昭和23年, 大月書店)等にも邦訳がおさめられている。この拙文にかかげる邦訳は、これを基礎としているが、多少の変更を加えた個処もある。

## 2. 経済と上部構造の関係

問題の核心は社会生活の土台と上部構造との関係についてのマルクス主義の解釈にある。これに関する考えを、プレハーノフの一代表作 G. Plechanov, Die Grundprobleme des Marxismus: autorisierte Uebersetzung aus dem Russischen von K. Schmückle, hrsg. von D. Rjazanov, Wien-Berlin 1922. 恒藤恭邦訳『マルクス主義の根本問題』, 大正10年, 岩波書店)によって分解すると、つぎの通りとなる。

- (1) 生産力の状態
- (2) これによって制約される経済諸関係
- (3) 経済的基礎の上に発生した社会的, 政治的秩序
- (4) 一部は直接に経済によって, 一部は経済の上に発生した社会的, 政治的秩序によって, 規定された社会的人間の心理
- (5) この心理の諸特性を反映する諸種の観念諸形態 (前掲書, 独訳81頁, 邦訳131—132頁)。

これは、社会生活の階層構造について基本的なものから出発して、そうでないものへの順位をしめすものである。基本的なものの変化が原因となって、漸次、上部構造に変化が及んでゆくというのである。

ここで問題となるのは、人間の思惟, 学問, 芸術, 政治的活動等, いわゆる上部構造が、社会発展においてもっている重要性である。マルクスは、その起草にかかる『国際労働者協会』総務委員会の、フランスにおける内戦に関する1871年の宣言第三部のなかで、つぎのように述べている。「労働者階

級は実現すべき何らの理想ももっていない。崩壊しつつある市民社会の胎内に、すでに発展してきた新社会の要素を解放するだけで良いのである」と。要するに、政治等は、因果必然的な現象の生成について、単に助産者の役割を演ずるに過ぎないというのである。

### 3. スタムラーの批評

これについては、19世紀以来今日まで、理想主義者、ことに新カント主義者から、絶えず批判が加えられている。比較的早い時代の代表者の一人はスタムラーである。スタムラーは、その代表作 *Rudolf Stammler, Wirtschaft und Recht, 1896.* の随処で唯物史観に批判を加えているが、このなかで、マルクスの上記の見解に反対していう、「もし、かりに社会的発展が、もっぱら因果必然性による統一的自然過程において行なわれるとするならば、それに従うように意識的に決意したりすることは、すべて全く無意味となるであろう。それは丁度、かたい決意の下に、地球を太陽の周囲に廻転せしめようとする努力を意義あるものとして是認しようとするのに等しい」（原著第四版415—416頁）。

スタムラーは、別の小著 *R. Stammler, Die materialistische Geschichtsauffassung, 2. Aufl., Gütersloh 1927.* でも、つぎのように述べている。

「唯物史観は社会的運動の生成の観察と、その発展の傾向の確定に限られている。これは、しかしながら、その内面的正当性のためのいかなる根拠も提供しえないものであることは、さとられていない。そしてまた、科学的に認識しようとする社会的運動に関する自然科学的生成を、党派的努力によって助長しようとするにつけ加えることによって、一つの解くべからざる矛盾におちいつている。事実、現象の自然法則的観察についてのみ関係しているものとせば、『助長するということ』は空しい業であろう。天文学的に予期されている月蝕の生成について、それをさらに助長しようとする団体をつくったりすることは無意味である」（前掲書、51頁）。

スタムラーによると、政治活動等を認めることは、人間の理想、目的論的  
思惟の要素をとりいれるものであり、この意味でマルクス主義は因果必然論  
のみで一貫していないというのである。

この主張は、議論の内容に精粗の別こそあれ、唯物史観にたいする後世の  
人々の批判の基本的なよりどころとなっている。

#### 4. 経済と上部構造の相互作用

この種の批判にたいしては、マルクス主義者の側から多くの反批判がでて  
いる。ここで問題とするエンゲルスの三つの手紙も、これにたいする回答と  
もいえる。この手紙のなかで、エンゲルスは、唯物史観における経済の意  
義、社会変化の要因としての上部構造の重要性、両者の間の相互作用につ  
いて、明快に解説している。

ここでは、この問題について、もっとも重要と思われる部分を三つの書簡  
の中から引用しよう。

まず1890年のプロッホ宛の手紙のなかで、主張している。

「唯物史観によると、歴史における窮極の決定的契機は、現実の生活の生  
産及び再生産であると。それ以上のことは、マルクスも私も主張したことは  
ない。もしこれを曲解して、経済的契機が唯一の決定的なものであるとする  
人があるならば、彼は、かの命題を化して無意味な抽象的な無稽の空語とす  
るものである。経済的状态が基礎ではあるが、しかし上部構造の種々の契機  
——階級闘争の政治的諸形態と闘争の成果——戦勝の後に勝利者階級によ  
って確立される諸制度等——法律形態、そしてさらに参加者の脳裡における  
すべてこれらの現実的諸闘争の反射、すなわち政治的、法律的、哲学的諸理  
論、宗教的直観及びそれらの教義体系への発展、これらのものも、また歴史  
的闘争の推移にその影響を及ぼし、多くの場合において有力に闘争形態を規  
定する」（前掲『書簡選集』独文 502 頁、邦訳 244—245 頁）。

「われわれは、われわれの歴史を自らつくる。しかしまず第一に全く特定

の諸前提及び諸条件のもとにおいてである。なかんづく経済的のそれが窮極的に決定的なものである。しかし政治的その他のそれも、実に人間の頭脳に巣くう伝統でさえも、決定的なものではないにしても、一つの役割を演ずる。プロイセンの国家もまた、歴史的な、窮極においては経済的な原因によって成立し発展している。しかし北ドイツの多数の小国のうちから、とくにブランデンブルグが、南ドイツにたいする北ドイツの経済的、言語的差異、及び宗教改革以後は宗教上にも生じた差異を、具現する大国となるべく定められたのは、経済的必然によるものであって、他の諸契機（ことに、プロイセンの領有によって、ポーランドとの、またそれを通じて国際政治関係との紛糾——国際政治関係は実にオーストリア王権の形成に際しても決定的である）によるところがないと主張するが如きは、小理窟でも、こねなければ、できないことであろう。過去及び現在のドイツの各小国の存在を、経済的に説明したり、或はズデーテンからタウヌスにいたる山脈によって形成された地理的隔壁を、全ドイツを通ずる本式の裂け目にまで拡張した高地ドイツ語の子音移動の起源を、経済的に説明したりすることは、物笑いとならずに成功することは困難であろう」（独文503頁，邦訳245—246頁）。

「また第二に歴史が進行するのは、終局の結果がつねに多数の個別意志の衝突から生ずるといふ形においてであり、個別意志の各々は、さらに一群の特殊の生活条件によって、その今ある如きものに、つくりあげられる。従って相互に交叉しあう無数の力、力の平行四辺形の無限の群があつて、それから一つの合成力——歴史的出来事——が生じ、この合成力自身がまた全体として無意識的かつ無意志的に作用する一つの力の産物とみられうる。何故ならば、各々の個人が欲するところは他の各個人によって阻害されるので、結果としてあらわれるのは、誰もがとくに欲したようなものでなくなるからである。かくして従来歴史は一つの自然過程のように推移し、また本質的には同じ運動法則に従っている。しかし個々の意志——その各々は、体質と外的な、窮極において経済的な事情（彼の特殊な個人的な或は一般社会的な）

とが、彼を駆ってなさしめるところのものを意欲する——が、それらの欲するところに達成せず、共通の合成力という一つの総平均に融合するということ、このことから、個々の意志は零に等しいとみなされるべきであると結論されてはならない。それとは反対に、各々が合成力に寄与し、その限りにおいて合成力の中にふくまれている」(独文503—504頁, 邦訳246—247頁)。

1894年のスタルケンブルグ宛の手紙のなかでも、同じ趣旨のことを、つぎのように述べている。

「政治的、法律的、哲学的、宗教的、文学的、芸術的等の発展は経済的発展に依拠している。しかし、それらはすべて相互の間にも、経済的基礎にも反作用を及ぼす。経済的状态が原因であり、ただそれのみが能動的であって、他のすべては単に受動的な結果であるに過ぎないというのではない。そうではなく、窮極においては、つねに自己をつらぬく経済的必然性の基礎の上で、交互作用が行なわれるのである。……従って往々にして人々が安易にも考えたがるように、経済的状态の自動的作用が歴史をつくるのではなく、人間が自らその歴史をつくるのであるが、それは人間を制約する所与の環境の中で既存の事實的諸関係の基礎の上で行なわれるのであり、なかんずく経済的關係は、いかにそれが他の政治的及び觀念形態的諸関係によって影響されるとしても、窮極においては決定的なものであり、ただそれのみが理解にみちびくところの一貫せる赤い糸なのである」(独文560頁, 邦訳250—251頁)。

## 5. 歴史における個人の偶然性

つぎに1894年の同じ手紙のなかで歴史上における個人の意義を問題にしている。

「いわゆる偉人が問題となる。かような一人が、そしてまさに、この人が、この特定の時に、この特定の国に出現するということは、もちろん純粹の偶然である。しかし、われわれが彼を抹殺し去っても、その代りの者にたいする要求はなくなるわけではなく、そしてこの代りの者は見出される。善かれ

悪しかれ結局は見出されるのである。……ナポレオンが出なかったならば、誰か他の人がその代りにその地位にあらわれたであろうということは、必要なときには、その人物が、いつでも必ず見出されたということによって明らかである。ケーザル、アウグスツス、クロムウェル等は、それであった。唯物史観を発見したのはマルクスであるが、ティエリも、ミニエも、ギゾーも、1850年までのイギリスの全歴史家も、この発見への努力がなされたことを示している。そしてモルガンによる同じ史観の発見は、そのために時が熟していたこと、そしてまさに発見されざるを得なかったことを示している。

歴史上のすべてそれ以外の偶然事、また偶然と見えることについても同様である。われわれが研究しようとする領域が経済的なものから遠ざかって、純粹に抽象的な観念形態的なものに近づくにともない、この領域がその発展の中に偶然性を示すことが、ますます多くなってくる。またその曲線は、ますますジグザグに進行する。しかし、あなたがこの曲線の平均軸線を描いてみるならば、観察される期間が長ければ長いほど、また取扱われる領域が大きければ大きいほど、あなたは、この軸線が経済発展の軸線に、より近似的に並行することを見出すであろう」（独文560—561頁、邦訳251—253頁）。

## 6. 商業、国家の経済への作用

1890年のシュミット宛の手紙のなかでも、上部構造が経済的發展に及ぼす作用を認めるとともに、これに限界があることを明らかにしている。これにつき、その実例を商業、貨幣市場、国家、政治、法律、宗教、哲学等にもとめて論じている。ここでは、そのうち商業、国家との関係について述べている部分を引用しよう。

まず商業についていう。

「社会的規模における分業が存するところには、部分労働者相互間の独立化も存在する。生産が窮極における決定者である。しかし生産物を扱う商業が本来の生産にたいして独立化されるや否や、その行なう運動は、だいたい



において生産によって支配されるのではあるが、個々の場合には、そしてこの一般的従属関係の内部においては、やはり、この新たな要因の本性のうちに存する固有の諸法則に従うものである。そしてこの運動はそれ自身の諸段階を有し、それとして再び生産の運動に反作用をする。アメリカの発見は、すでに以前からポルトガル人をアフリカにかりたてていた貨幣餓渇に負うものであった(ゾートベア著『貴金属生産』をみよ)。なぜならば14世紀及び15世紀において急激に拡張されたヨーロッパの工業とそれに対応する商業とは、多量の交換手段を必要としたからである。ところがドイツ——1450年から1550年にいたる間の大産銀国——は、それを供給し得なかったのである。1500年から1800年にいたるポルトガル人、オランダ人、イギリス人によるインドの征服は、インドからの輸入を目的としたものであって、インドへの輸出のことを考えるものはなかった。ところが、この純粹に商業的関心によって起された発見と征服とが、何という巨大な反作用を工業に及ぼしたことか。大工業をつりだし、そしてそれを発展せしめたのは、実にこれらの国への輸出の必要であった」(独文505—506頁, 邦訳 233頁)。

これを、より一般的な形で述べると、つぎの通りとなる。

「新たな、独立した力は、なるほど、全体としては生産の運動に従わねばならないが、しかし、それに内在する、すなわち、ひとたびそれに移譲されて次第に更に発展した相対的独立性によって、再び生産の諸条件と行程とに反作用する。そこには二つの異なる力の交互作用がある」(独文 507頁, 邦訳235頁)。

つぎに国家という上部構造が経済的発展に及ぼす作用を認めるとともに、これに限界があること、つぎの三様式があることを明らかにしている。

「経済的発展にたいする国家権力の反作用には三つの様式がありうる。それはまず同じ方向にむかって、おこり得る。その場合には、発展は、より急速となる。つぎには、反対の方向に動きうる。この場合には、今日では、いずれの大民族にあっても、長い間に、かかる反作用は消滅してしまっている

であろう。或はまた、経済的發展にたいして一定の方向を遮断して、他の方向を指示することがありうる。この場合は、結局、前述の二つの場合の一つに帰着する。しかし第二及び第三の場合には、政治的権力が経済的發展に大損害を与えて力と物質との大量浪費をひきおこすことがありうるのは明らかである」(独文507頁, 邦訳236頁)。

### 7. 後進マルクス主義者の誤謬

以上がエンゲルスの三つの手紙からの関係個処の引用である。彼の力説するところは、要するに、上部構造から経済的土台への反作用を、——経済的必然という大きなわくの内部においてという条件つきではあるが、とにかく反作用——を認めるということである。この反作用是認論は、それから後の史的唯物論の教科書や研究書でも、必ず是認され継承されているものであって、今世紀になってから出版されたどの教科書にでも、必ず出ている。また最近では経済的基礎と上部構造の関係、上部構造そのもの、またはその相互間の関係については、多くの精緻な理論研究も発表されている。最近私が接し得た研究中から一例をあげると、宇佐見誠次郎「『土台・上部構造』の理論について」(一橋大学経済研究所編集『経済研究』第13巻第3号, 昭和37年7月所載)がある。これは主としてロシア語の研究を取扱うものである。

こういう風に、一方では唯物史観学説そのものの精緻化への努力がなされている。これにたいしては、われわれは大いに敬意を表さなければならない。ところが、現在、遺憾なことには、マルクス主義による現実分析と称せられているものの中には、今なおエンゲルスの警告を無視し、いわば色盲的に非経済的要因を故意に軽視し、経済的事情のみに過度の重点をおくものが多いのである。唯物史観に関する最近の教科書コンスタンチーフ監修、モスクワの科学院哲学研究所篇『史的唯物論』(第2版1954年)のなかでも、つぎの叙述がある。

「卑俗化論者や単純化論者は、イデオロギーの発展のこの特異性を考慮せ

ず、イデオロギーの任意の変化、たとえば任意の哲学的概念または芸術上の見解を、経済の変化から、またさらに生産や技術上の変化からさえ直接に、ひきだそうとつとめている。レーニンはマルクス主義の卑俗化論者シュリャチコフをばくろしたが、シュリャチコフは、ブルジョア哲学の概念及び公式の『いっさい合切』を、資本制マニュファクチュアの技術と経済構造とから、プロレタリアートとブルジョアジーのあいだの関係からひきだそうとつとめた。……レーニンは卑俗化論者シュリャチコフの著書を『唯物論の法外な卑俗化の模範』として、『歴史における唯物論の戯画化』として特徴づけた（ソヴェト研究者協会邦訳『史的唯物論』第1冊、昭和30年、大月書店、198—199頁）。これに類するゆき過ぎは、わが国の歴史や理論の特殊研究、現実分析書の中にも、多くみるところである。

すでに紹介したように、エンゲルスもブロッホ宛の手紙のなかで明言している。「往々にして経済的な面に、そのうけるべき以上の重点が後進者たちによって、おかれていることについては、マルクスも私も一部分は自ら責任を負わなければならない」と。しかしエンゲルスの場合には、つぎのような事情もあったのである。「われわれは、反対者にたいして、彼らによって否定された主要原理を強調せねばならなかった。そして交互作用に関与するそれ以外の諸契機に正当な地位を与える時と処と機会とが常にあるわけではなかった」（独文504頁、邦訳247—248頁）。

この点は後進マルクス主義者の場合とは、やや事情が違うのである。認識過多は認識不足と同じように、とかく性急なものが、おちいり易い陥穽である。政略の場合ならば、いざ知らず、歴史社会を科学的、客観的に分析しようとするものは色盲であってはならないのである。このことは、マルクス主義の場合のみには限らない。それ以外の学派の人々の場合もありうることは言をまたない。

## 8. 観念論への譲歩

最後に経済と上部構造の関係に関して私がもっている粗野な疑問について、その輪郭を、ここに掲げておきたい。

経済と政治、その他観念諸形態との間に交互作用があり、これを承認するのは、われわれの経験事実にも合致することである。しかし社会の発展の原因として観念形態から経済的土台への反作用を認めるということは、その程度だけ唯物論が観念論に歩をゆずるものと解さなければならないのではないか。観念論の立場からみると、外界の環境、外界の物的存在が、生産力としての意義をもつようになるのは、われわれの思惟が、その作用ないし価値を認識したとき、その場合にはじめて、そうなるのである。猫にとって小判が無意味なように、無知な野蛮人にとっては、近所に滝があっても、それが水力電気の動力源となることを理解しないから、生産力としての意義がないわけである。ウラン鉱区の存在は、原子力利用以前には、環境としての意義がなかったのである。人間の思惟が、その作用を分析し、その価値を認めるにいたって、はじめて、これが人間にたいして生産力、環境としての意義が生まれる。人間がこの世に発生する以前の物的世界についても、同じことがいえるのである。

こういう風に理解してくると、こういう意味において、思惟が第一次的であるという解釈が成立するのである。物的存在は、人間存在の前提条件であるが、受動的となる。この物的条件の下に思惟が活動する。この場合に、かくして認識され、開発、利用される生産力が、逆に思惟に反作用を及ぼすことは否定するわけではない。

これにたいして、つぎのような反対論がでるであろう。例えば滝に動力源としての価値を人間の思惟が認め、これを利用するようになったのは、生産力の発展がある段階に達し、それに対応して学術が進歩した結果であり、この意味で生産力が第一次的であると。

ところが、われわれの立場からいえば、そのまた生産力について、その意義を認め、進展せしめたものは、人間の思惟ではないかと主張したいのである。結局、鶏がさきか、卵がさきかという争いとなる。この問題を終局的に決定するのは、唯物論か唯心論かという古くして新しい哲学上の問題であろう。しかし「精神は脳という物質の作用である」とか、「物質は精神と異なり、宇宙の始まりから終わりまで、時間的にも空間的にも、普遍的に存在するから、精神は第二次的であり、物質が始原的である」等というような、素樸な主張では、唯物論のための証明とはならないことだけは述べておきたい。

## 9. 再 反 省 の 必 要

要するに、史的唯物論も反対論も、ともに、ものの存在、歴史の動因について、経験事実として、多くの要素があるのを認める点は同じである。両者の対立は、そのうちのどれに重点をおくか、どれに窮極的、第一次的意義を認めるかの相違にある。しかし両者ともに、反対学説が主張するところは、たとえ限定された程度においてとはいえ、とにかく一応は承認しているのである。形而上学における本体論の場合は別として、経験的社会科学の問題としては、どうしても複数の要因があることを認めざるを得ない。学説の分岐は、それを認める程度、その限定のしかたについての相違にある。これが素直な解釈であろう。二元論だとか、折衷論だとか、常識論とか、或は、ときに、済度すべからざるブルジョア的見解等といって、かるく一蹴したり、嘲笑したりしないで、いま一度、ここから出発して、この学説について反省、吟味をしてみる必要があるのではないか。

エンゲルスも1894年のスタルケンブルク宛の手紙のなかで、つぎのように、述べている。

「観察される期間が長ければ長いほど、また取扱われる領域が大きければ大きいほど、この軸線が経済的發展の軸線に、より近似的に並行する」と。これを裏からみると、観察される期間と領域が短小であればあるほど、歴史

社会の生成発展における非経済的要因の作用の力が大である場合がありうる事実を承認するものである。現実の歴史的社會現象の理解、分析の場合に、問題がおこり、争いが生じうる余地があるのは、この力の大きさの評価についてである。(終)